

2022（令和4）年度 音楽鑑賞教育振興 助成研究募集 入選研究計画論文

2022（令和4）年度 音楽鑑賞教育振興 助成研究募集では、鑑賞領域の学びを中心とした音楽科教育に資する実践的な研究計画を募集し、右記の通り入選者を決定しました。入選者には2年間の研究に取り組んでいただきます。

《2022年度 実施概要》

○募集テーマ

鑑賞領域の学びを中心とした、音楽科教育に資する実践的な研究

○応募状況と入選数

応募数：4件 入選数：1件

○審査基準

次の①から④までを満たす研究計画である。

- ① 鑑賞領域の学びを中心としている
- ② これからの音楽科教育に資する内容である
- ③ 授業実践による検証を伴った研究である
- ④ 研究の成果が、音楽科教育において広く普及することが見通せるものである

○選考委員

河野正幸 聖徳大学教授
嶋 英治 元福島大学特任教授
辻村哲夫 選考委員長／元文部省初等中等教育局局長
／公益財団法人音楽鑑賞振興財団常務理事

○選考専門委員

小佐野圭 玉川大学教授／全日本音楽教育研究会常任理事
加藤富美子 東京音楽大学客員教授
藤沢章彦 元国立音楽大学教授／公益財団法人音楽鑑賞振興財団理事

○審査顧問

福井直敬 武蔵野音楽学園理事長／全日本音楽教育研究会会長

○後援

全国都道府県教育長協議会
全日本音楽教育研究会
全国連合小学校長会
全日本中学校長会
全国高等学校長協会
一般財団法人日本私学教育研究所

○主催

公益財団法人音楽鑑賞振興財団

入選者	〈個人研究〉 広島大学附属三原中学校 井上 翔太
研究テーマ	探究的に音楽を鑑賞し、質的な深まりと自分なりの価値を見いだす授業の研究 ～多様な対話を通して～
助成金額	500,000 円

(研究助成金額は、研究計画書とともに提出された予算書に基づき、選考委員会において決定しました。)

ご挨拶

音楽鑑賞の授業では、生徒たちに曲や演奏について評価させたり生活や社会における音楽の意味を考えさせたりと、様々な指導が行われます。こうした基礎的な学習を積み重ねて音楽の良さや美しさを味わって聴く力、音楽鑑賞の力は育まれていきます。

重要なことは生徒たちが「自分なりに」評価したり考えたりするということです。「自分なりに」すなわち「主体的に」は、現在、日本の生徒たちの学びで特に重視されていることです。音楽鑑賞の力は、曲や演奏について他人の借りものの評価を鵜呑みにするのではなく、自らの五感を働かせて聴いたり考えたりして培われていくのです。

本年度入選された研究には、生徒の視点に立って生徒が曲や演奏に自分なりの価値を見出す力を身に付けさせよう、そしてトータルの音楽鑑賞の力を付けさせようとする教師の意気込みを感じます。今後の研究の進展に期待しています。

(選考委員長：辻村哲夫)

選 評

助成研究募集への応募数が、以前に比べて増えてきていて、大変うれしく思っています。しかし、わかりやすく、現実味があって、今後の音楽科教育に資するアイデアや工夫のある計画とはどういうものか、応募者のみなさんには、今一度検討していただきたいと感じました。

研究の出発点である、最初の率直な疑問や、それを解決したいという気概はよく伝わってきますが、その課題や解決手段がグループまたは個人の思い込みや説明不足、情報不足である場合など、読み手に十分伝わらないことがあります。そのため問題・課題に対して、その解決方法は妥当か、適切か、その検証はどのようにするのかなどが、審査・選考において十分に了解しにくいという状況がみられます。今回は4件の応募がありましたが、いずれもこれらの困難点が共通に感じられました。

入選の井上翔太氏の計画は、音楽鑑賞を生徒が主体的、積極的に取り組むためのアイデアを、「対話」という切り口から実践してみようというもので、解決のアイデアが参考理論を踏まえて、誰もが取り組み可能な方法であることが評価されました。

教育という営みにはベストはなく、ベターはたくさんあります。ベターを求めて、また多くの応募があることを期待しています。

(選考専門委員チーフ：藤沢章彦)

● 入選

<研究テーマ>

探究的に音楽を鑑賞し、質的な深まりと 自分なりの価値を見いだす授業の研究 ～多様な対話を通して～



広島大学附属三原中学校教諭
井上 翔太

1. 研究テーマ設定の趣旨

本研究では、「探究的に音楽を鑑賞すること」を前提とし、「①質的な深まり」「②自分なりの価値を見いだす」の2つのことを達成することを目的とした研究である。

(1) 「探究的に音楽を鑑賞する」とは

「探究」という言葉については、『今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開（中学校編）』（文部科学省，2022）の中で、『『探究的な見方・考え方』とは、各教科等における見方・考え方を総合的に活用するとともに、広範な事象を多様な角度から俯瞰して捉え、実社会・実生活の課題を探究し、自己の生き方を問い続けること』と示されており、本研究もこの考え方を基本とする。また、中学校音楽科の学習指導要領解説（2017）では「鑑賞領域の学習では、曲想と音楽の構造との関わり、音楽の特徴とその背景となる文化や歴史などとの関わり、音楽の特徴から生まれる音楽の多様性などについて理解すること、批評などの活動を通し

て曲や演奏を評価したり、生活や社会における音楽の意味や役割などについて考えたりすること、これらが相互に関連し合うことが大切である」と示している。

音楽を鑑賞するという体験的な学習の中で、生徒が抱いた疑問は、自己と音楽とを関連させたり、生活や社会における音楽の意味や価値について考えたりしながら学習を進めていく、生徒自身の学びを深めるための問いになると考える。また、教師が曲に対する問いかけや、学びを深めるための発問を行うことは、曲を多様な角度から捉え、生徒の思考を促す学習場面につながると考える。これら一連の学習の流れや学習活動自体を総じて「探究的に音楽を鑑賞する」とした。また、後述(p.69)する「協同」ではなく「協働」的に学習することに重点が置かれた現行の学習指導要領の内容を参考に、生徒同士の対話などは、探究的に音楽を学ぶことにつながる問いを生徒の中に生むのか、また、生徒の抱いた問いは、教師の働きかけでどのように変容していくのかについても研究の中で明らかにしていく。

(2) 「質的な深まり」とは

齋藤 (2019) は「学びを深める」について、

「学びを深める」とは、子どもの学びが、他者の様々な考え方に触れることで広がり、他者の考えと自分の考えを比べ、自分の考えが明確になったり、自分の考えが変容（向上的変容）したり、自分一人では持ち得なかった新しい観点を得たりすることである。ここでいう「学び」とは、鶴田・河野 (2012) が言うように、「子ども一人ひとりが内側で構成する個性的で個別的な『意味の経験』」のことであり、ここでいう「意味」とは、「言葉の意味（語義）ではなく、人それぞれによってのとらえ方」としている

と定義している。本研究では、この考え方を引用し、「他者の様々な考えに触れ、自分の考えが変容すること」を「質的な深まり」の定義として研究を進める。

(3) 「自分なりの価値を見いだす」とは

「自分なりの価値を見いだす」ことについては、教材曲のもつ価値を再認識するという狭義のものではなく、前述した探究的な学習を通して自己と曲との関連について捉えたり、曲が現代社会に与える影響や人々に与える影響などについて捉えたりするなど、広い視点で楽曲を味わう生徒の姿と定義する。

本研究では、既存の経験・知識を生かしたり教科等横断的に学んだりする過程で、多様な対話をすることによって、楽曲の味わいが質的に深まり、音楽の価値を自分なりに見いだす生徒の育成につながるのか、また対話の場面がどのように相互に関連するのかということをはっきりとさせていく。



図1：本研究のイメージ

2. 研究内容

本研究の副題として「～多様な対話を通して～」と設定している。この「対話」とは、前述した協働の場面での生徒同士の対話だけではない。本研究における多様な対話について、主に以下の4つの対話の場面を設定する。

(1) 背景との対話 (図2)

末永 (2020) は、美術での鑑賞において「背景とのやりとり」とは、「作者の考え」「作者の人生」「歴史的背景」「評論家による分析」「美術史における意義」などを、作品を背後から成り立たせている様々な要素としている。この考え方を引用し、本研究における背景との対話とは、「作者の思い／作者の人生／作品の歴史的背景（作曲された当時の時代背景など）／評論家による分析／音楽史における意義、等の要素を

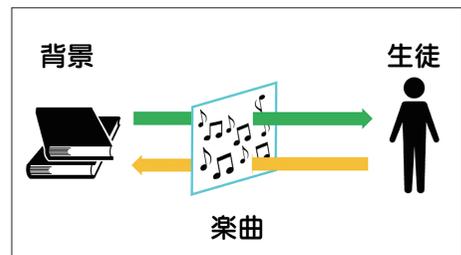


図2：『自分だけの答え』が見つかる13歳からのアート思考」末永幸歩 (2020) p156 より筆者作図

含むものに触れ、知識面から考えを拡げること
で、感じ方や考え方が深まる活動」と定義する。

この背景との対話を充実したものにするため
には教科等横断的な学習の視点が含まれる。教科
等横断的な視点について、学習指導要領総則
(2017) では次のように記載している。

- ①各学校においては、生徒の発達の段階を
考慮し、言語能力、情報活用能力（情報モ
ルを含む。）、問題発見・解決能力等の学
習の基盤となる資質・能力を育成してい
くことができるよう、各教科等の特質を
生かし、教科等横断的な視点から教育課
程の編成を図るものとする。
- ②各学校においては、生徒や学校、地域の
実態及び生徒の発達の段階を考慮し、豊
かな人生の実現や災害等を乗り越えて次
代の社会を形成することに向けた現代的
な諸課題に対応して求められる資質・能
力を、教科等横断的な視点で育成してい
くことができるよう、各学校の特色を生
かした教育課程の編成を図るものとする。
(~~~~線部は筆者によるもの)

この記述から、教科等横断的な視点は

- 各教科等の特質を生かす必要があること。
 - 学習の基盤となる資質・能力を育成する目
的で行うこと。
 - 現代的諸課題に対応して求められる資質・
能力を育成する目的で行うこと。
- の側面があると考えられる。

教科横断的*な知識について白井(2020)は、

より VUCA となる 2030 年の世界におい
て、複雑化する問題に対して様々な解決
策を見出すためには、各教科の学問分野
を越えて考えたり、「点と点をつなげるこ

と (connecting the dots)」が必要になる
(OECD, 2018a)。教科横断的な知識が重要
なのは、それらが、各学問分野の原理や概念、
コンテンツを、別の学問分野の原理や概念、
コンテンツと関連付ける知識であるという
ことにある。すなわち、教科横断的な知識
を獲得することで、ある知識を他の分野へ
と転移 (transfer) させることが可能になる
のである。

と述べている。このことから、教科横断的な
学習を計画・実施する際には、生徒が各教科で
得られた知識やそれぞれの経験などの、生徒の
中で点として存在しているものを結び付けるこ
とが、今後複雑化する問題の解決策を見いだす
上で求められてくると解釈できる。また、教科
横断的な知識の獲得が、知識を他の分野に転移
させることが可能になると解釈できる。なお、
転移について白井(2020)は、「一般に、学ん
だことを、新しい場面や文脈で使えるようにな
ることを意味する。」と述べている。これらの
ことから、本研究の中で、背景との対話を充実
させる視点としての教科等横断的な授業づくり
や、教科等横断的な学習を計画する上での音楽
科の特質についても明らかにしていく。

(2) 作品との対話 (図3)

末永(2020)は、美術での鑑賞において「作
品とのやりとり」とは、作者の解釈や「正解」
にとらわれず、ただ純粋に作品だけに向き合う
瞬間が大切であると述べている。

この考え方を引用し、本研究における作品と
の対話とは「楽曲の演奏だけでなく、楽譜など
の情報も含んだ楽曲そのものを味わい、自分な
りの考えをもつこと」と定義する。ここでは、
曲想と音楽の構造との関わりや音楽の特徴につ

* 白井は「教科横断的」と表記。

いての知覚・感受が的確に行われることが重要になると考える。

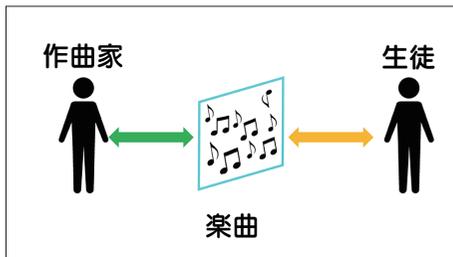


図3：『自分だけの答え』が見つかる13歳からのアート思考 末永幸歩(2020) p158より筆者作図

(3) 自己との対話 (図4)

(1) 背景 (2) 作品の対話を受けて設定した場面が、自己との対話である。自己との対話に類似した言葉に、文部科学省(2007)の「クリティカル・リーディングの考え方によって、自らの考えを深めること(自己内対話)」が挙げられる。本研究では、自己との対話を「背景との対話や作品との対話を通して深まったことを自己の経験と結び付けることでさらに深めること」と定義する。

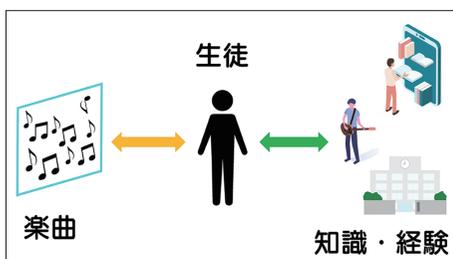


図4：図2、図3を参考に筆者作図

(4) 友達との対話 (図5)

中学校音楽科の学習指導要領解説では、

協働的としているのは、音楽科の学習の多

くが、他者との関わりの中で行われることを大切にしているからである。これまでも、合唱や合奏など、他者とともに一つの音楽表現をつくっていく体験を通して、イメージを伝え合ったり、協同する喜びを感じたりすることのできる指導を大切にしてきた。ここでの「協同」は、力を合わせて合唱や合奏によって一つの音楽表現をつくり上げることなどを指している。このことの成果を踏まえつつ、今回の改訂では、合唱や合奏などにおける「協同」に留まらず、表現及び鑑賞の学習音楽科の目標において、生徒一人一人が自らの考えを他者と交流したり、互いの気付きを共有し、感じ取ったことなどに共感したりしながら個々の学びを深め、音楽表現を生み出したり音楽を評価してよさや美しさを味わって聴いたりできるようにすることを重視し、協働的とした。

と述べている。これらのことから、友達との対話を学習の中で意図的に取り入れることは重要と考える。本研究では、友達との対話を「多様な考えに触れる中で、自己の考えを強化したり補填したり修正したりできるような質的な深まりにつながる対話」と定義する。

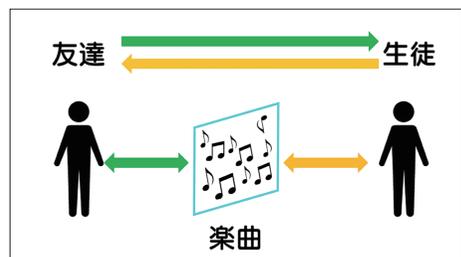


図5：図2、図3を参考に筆者作図

以上4つの対話について、学びを深める上で有効であった場面設定やそれらの対話の相関関係などを、授業実践により検証していく。

3. 研究方法

本研究では、研究を進める上での具体的な視点として次の3つの視点を考えている。

(1) 鑑賞の年間指導計画と授業実践

①鑑賞の学習において扱う音楽を形づくっている要素を明確にした年間指導計画の設定

鑑賞の学習では、それまでの自己の経験や知識を生かして鑑賞を深めていく際に、音楽を形づくっている要素を根拠に自分の言葉で語ることを大切にしている。そこで、表現領域との学習とも往還させながら、音楽を形づくっている要素が実感を持った言葉、概念となるように学習を進めていく。その際に、鑑賞の学習で扱う楽曲を、指導事項に関わらせて教材研究を進めるとともに、効果的な年間指導計画の検討・作成を行う。

②題材のゴールの設定

鑑賞の学習の最後に、紹介文や批評文などに、様々な対話を通して質的な深まりや自分なりに価値を見いだしている生徒の姿を題材のゴールとし、言語表現する機会を設定する。題材を通して生徒自身が自己の成長や学びを実感できるような機会にするとともに、紹介文や批評文の形態を検討・計画し、(3) 研究の効果の検証でも使用する。

また、題材末に紹介文や批評文の学級や学年内、学年を超えた交流などを行う中で、多様な対話を通して、学習が深まったということを自己認識できるような機会を設け、そのような多様な対話の場面を設けたことによる効果について検証する。

(2) 中学校3年間を見通した題材計画

中学校の鑑賞領域の内容は

ア 曲や演奏に対する評価とその根拠、生活や社会における音楽の意味や役割、音楽表現の共通性や固有性を考え、音楽のよさや美しさを味わうこと。(思考力、判断力、表現力等)

イ 曲想と音楽の構造との関わりの理解、音楽の特徴とその背景となる文化や歴史、他の芸術との関わりの理解、音楽の多様性の理解など(知識)

と示されており、第1学年では「自分なりに考え」、第2学年及び第3学年では「考え」と示されているように、中学校3年間であっても段階を経て学習が深まることや、より客観性がある言語表現をすることが求められている。

教科書を見てみると、学年が進むにつれて教材のもつ音楽性が抽象的になったり、他の文化や作品の歴史的背景との結び付きが強くなったりしながら学習を深めていけるように教材が配列されている。

しかしながら、音楽科の年間時数には限りがあるので、中学校3年間の学びの中で前述した鑑賞領域の内容を踏襲しながら、音楽を聴き深めていく生徒を育成することができるように、生徒の学んでいる姿を中心にしながら効果的な3年間の題材計画を整理したいと考えている。

(3) 研究の効果の検証

授業実践の記録とその分析を中心に研究の効果を検証していく。

①生徒の記述したワークシート等を MAXQDA** を用いて行う記述内容の分析

授業で使用したワークシートや生徒の振り返りなどの記述内容を、MAXQDA ソフトを用いて学習を通して音楽を聴き深める姿や、音楽を

**ドイツの VERBI GmbH 社が開発した質的分析ソフトウェアのこと。

形づくっている要素を知覚し根拠をもって音楽を感受したことを言語表現している記述について、何が影響しているのかななどを整理・分析する。

②アンケート調査による検証

題材の最後に行う、題材での学びの深まりを振り返るアンケートの中で、多様な対話の場面などがどのように鑑賞に効果的に働いたのかという質問を行い、生徒の回答を整理・分析する。

③音声・映像記録での生徒の発言・行動の記録

授業実践の中での生徒の学習の様子や発言について、音声及び映像を記録する。記録した生徒の発言を音声入力でテキスト化し、テキスト・マイニングで分析することにより、本研究において音楽を形づくっている要素など、音楽の特徴を表す言葉がどのように増えているのかということについて分析する。

④抽出生徒の設定、変容の記録・分析

抽出生徒を各クラス3名ほど選出し、本研究を進めていくうちに音楽科の学習がどのように質的に深まったのかということ进行分析する。その際、①MAXQDAソフトや②アンケート調査などの結果も参考にしながら分析を進め、その効果を検証する。

⑤小学校の音楽科教諭との共同による、本学校

園音楽部会としての9年間の検討

授業の実践について、本学校園音楽科部会と共有することにより、音楽科の学習の質的な深まりについて検証する場を設け、小学校6年間の音楽科の学びの連続性を大切に、中学校3年間の題材計画・効果的な題材の配列について検討する。

4. 研究スケジュール

本研究では、2022年度をプレ研究として3年間での研究を計画している。

【研究スケジュール】

プレ研究（2022年度）

- ・研究に関わる情報収集、教材研究
- ・鑑賞の学習を中心とした題材構想
- 授業の実践と振り返り（第1期：4月～9月
第2期：10月～3月）
- 次年度からの研究に向けて（2月）

第1次研究（2023年度）

- ・鑑賞の学習を中心とした題材構想
（年間指導計画の策定と鑑賞の質的な深まりにつながる授業実践）
- 授業の実践と振り返り（第1期：4月～7月
第2期：9月～12月）
- ※教育研究会や学会等に参加し、本研究の充実に向けての情報収集を行う。
- 今年度の取り組みの成果と課題の検討（1月）
- 第1次研究のまとめと次年度の研究についての計画（2月）

第2次研究（2024年度）

- ・第1次研究を受けた、鑑賞の学習を中心とした題材構想
（年間指導計画の策定と鑑賞の質的な深まりにつながる授業実践）
- 授業の実践と振り返り（第1期：4月～7月
第2期：9月～12月）
- ※教育研究会や学会等に参加し、本研究のまとめ（成果と課題）の方向性を定める。（11月～12月予定）
- これまでの取り組みの成果と課題の検討（12月）
- 2年間の研究のまとめ（1月）

以下に、本研究で予定している授業計画の例を挙げる。

①題材「登場人物の心情の変化に着目して音楽を聴こう」(第1学年)

〈教材『魔王』(F.P. シューベルト作曲)〉

『魔王』の音楽の特徴と登場人物の心情の変化に着目して鑑賞の授業を行う。その際、様々な対話(作品そのものとの対話、作品を介しての他者との対話、また作曲された背景にある作曲家との対話など)の場面を設定する。

それらを、研究内容で設定した「背景との対話」「作品との対話」「自己との対話」「友達との対話」にカテゴリ分けして示し、対話の中で、学習の質的な深まりを実感したもの(鑑賞の学習において特に有効であったもの)や、関連することで有効であったものなど、複数の質問項目から、生徒がこの教材で学習に向かう際に有機的に関連し学びの深まりに働いた項目について調査する。

②題材「歌舞伎の魅力に迫ろう」(第2学年)

〈教材 歌舞伎『勸進帳』より(四世杵屋六三郎作曲)〉

総合芸術という視点でオペラ『アイダ』と関連させながら歌舞伎『勸進帳』を学習し、歌舞伎の魅力に迫る学習を実施する。その際、歌舞伎の成立した背景や舞台機構など、歌舞伎『勸進帳』の下支えとなる様々な要素について触れる。それらの作品との対話や背景との対話での学習の質的な深まりの効果を検証していく。

③題材「カンディンスキーの作品の中の音楽とは」(第3学年)

〈教材『コンポジションⅧ』『Improvisation』(W. カンディンスキー作) / 『3つのピアノ

小品』(シェーンベルグ作曲) / その他、法人作曲家による現代曲等〉

作品のもつ抽象性という視点で、カンディンスキーの作品とシェーンベルグの作品等をつなげ、美術科と音楽科との学習を関連付ける。その際に、『3つのピアノ小品』の楽譜やオーケストラの演奏の様子などを鑑賞しながら広い視点で音楽を捉えるとともに、「カンディンスキーの作品から聴こえてくる音楽とは?」という広い問いを投げかけることによって、抽象的に表現された音楽や美術の魅力を言葉で表現する学習を行う。

魅力を言葉で表現するのに必要な情報を集めるなど、多様な対話を通して学び、中学校音楽科の学習の総括的な題材として位置付け、これまでの学習の積み重ねを実証する。

※新型コロナウイルス感染拡大防止の状況により、合唱やリコーダーなどの活動制限が緩和されれば、授業計画を再考することがある。

【引用・参考文献】

- ・文部科学省「学習指導要領(平成29年告示)解説音楽科編」教育芸術社, 2017
- ・「音楽の聴き方—聴く型と趣味を語る言葉」岡田曉生(中公新書), 2009
- ・『自分だけの答え』が見つかる13歳からのアート思考 末永幸歩(ダイヤモンド社), 2020
- ・「OECD Education2030プロジェクトが描く教育の未来 エージェンシー、資質・能力とカリキュラム」白井俊(ミネルヴァ書房), 2020
- ・『今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開(中学校編)』(文部科学省), 2022
- ・「鑑賞活動における言語とイメージの共有に関する一考察」萱のり子, 2015
- ・「音楽的思考の論拠とする「教科等横断的な視点」の「発問」の導入効果—中学校歌唱共通教材《花》の実践より—」尾崎祐司・小助川謙二, 2019
- ・「各国の音楽カリキュラムにおける鑑賞・聴取領域の内容に関する研究—コンテンツベース、コンピテンシーベースの視点を中心に—」三村真弓・伊藤真・峯恭子・松下友紀・吉富功修・井本美穂, 2016
- ・「芸術教育による拡散的思考を活かした教科横断的な取り組みへの一考察」渡辺行野・鈴木一成・大熊誠二, 2019
- ・「国語科と音楽科における教科横断的な学習—鑑賞と批評を視点として—」関向央奈, 2017
- ・「対話を通して学びを深める授業づくり—国語科における文学教材を中心として—」齋藤知美, 2019